



子どもを地域で育む居場所



高齢者が輝ける居場所に向けて



＼コロナ下でもつながりたい／
**ひとりぼっちを作らない
居場所づくり**

地域のつながりが失われやすい現在の社会において、子どもから大人、高齢者に至るまで社会的な孤立が問題になっています。人との接触を避けざるを得ないコロナ下では、不安・孤独感を感じている人がさらに増えている状況です。

そんなコロナ下においても、人と人がつながる居場所を作りたいという熱い思いを持った人たちがいます。今回の特集では「ひとりぼっちを作らない居場所づくり」をしている方々を紹介します。



食を通じてつながる居場所



コロナ下でも居場所を！

「松戸市版居場所サミット」を オンラインで開催しました



12月10日、1月17日の2日間にわたり、地域で居場所やサロン活動に取り組む運営者の皆さん（22団体）がオンライン上で、コロナ下での活動の状況や工夫していることなどを語り合いました。これからの活動のヒントが得られたり、お互いに共通の悩みを共有したり、意見交換をしました。

外出自粛やステイホームが求められる中でも、地域でつながり続けていく、つながりを作っていくことの大切さを改めて感じることができました。サミットで語られた声を紹介します。

活動の状況

- 新型コロナ感染回避のため中止にした活動が多くある
- 子どもたちの活動は公園などを活用したり、町会でも花の植え替えなど屋外の活動をするなどの工夫をした
- 活動を縮小し、来てくれる人は減ったが、居場所の必要な人の声がより届いた

居場所の参加者・利用者から聞こえる声

- コロナ下で出かけられず、行き場所がないので屋外での花植え活動は楽しい
- 人との会話の機会が減っているため、フードパントリー（食材配布）で声を掛け合うだけでも元気が出る
- 閉じこもりがちになって体力が低下しないか心配なので、オンラインでの体操教室はありがたい



松戸市版居場所サミットの様子

これからの活動

- 今できることを見つけて活動を続けていきたい
- 活動が途切れないように運営者同士の連携も図っていきたい
- オンラインの活用は、感染防止対策にもなるし、ネット環境に強い若者の参加にもつなげていきたい
- 高齢者でもスマホの活動講座などで新たなチャレンジのきっかけを作りたい

コロナ下でもつながり続けようと考え活動している人が地域にはたくさんいます。居場所サミットは、そんな熱い皆さんがつながる時間となりました。自分の地域にある居場所やサロンをみつけてのぞいてみてください。そこにはきっと心地よい会話と時間がありますよ！

子どもたちを地域で育む居場所



（株）ジェイテック&なないろのもり

矢切駅前にある「生涯学習・就職支援スクール まなクル」を活用して、子どもたちの居場所づくりに取り組んでいる方たちがいます。まなクルを運営する（株）ジェイテックと、子どもの健全育成を目的に活動しているなないろのもりの皆さんです。

活動のきっかけ

「まなクルは生涯学習・就労支援スクールとして運営しており、子どもも大人もシニアも学べる場所です。そういった取り組みをしている中で、まなクルのスペースを有効活用し、子どもだけではなく多世代の居場所づくりとして地域貢献が可能なのではないかと考えました」と（株）ジェイテックの堀川さんは、活動のきっかけを話してくれました。

「なないろのもりは、子どもや子育て世代をターゲットにイベントやワークショップを開催していましたが、多世代のつながりということも意識しているタイミングでもありました。子どもたちが集える場所があまりない地区なので、そういった場所が増えてほしいと願い活動しています」となないろのもりの太田さんと染谷さんは（株）ジェイテックと協働して居場所づくりに取り組んでいる目的を語ります。

「子ども向けのイベントを企画すると、地域の方々も協力的です。自身の経験を活かしワークショップをやってみたいという人もたくさんいるし、地域の商店がイベントの出店もしてくれます。」となないろのもりの太田さんと小林さんは地域の方々積極的に参加している現状を語ります。



（株）ジェイテックの堀川さん



左から、なないろのもりの染谷さん、太田さん、小林さん



まなクルのラウンジ
(気軽に立ち寄れる居場所に)



まなクルの大会議室
(ワークショップなどに利用可能)

どんな居場所？

子どもたちが気軽に立ち寄れる居場所を目指しています。勉強をしたり、おしゃべりしたり、本を読んだり、思い思いに過ごせる居場所です。

楽器体験やプログラミング体験など、参加のきっかけになる催しも行っていきます。スタッフとして参加している大人とも、付かず離れずの距離で、でも見守られているという安心感を感じてほしい。そんな思いで（株）ジェイテックとなないろのもりの皆さんは活動しています。

コロナ下での居場所づくり

人との接触を避けざるを得ないコロナ下においては、居場所づくりという活動は難しくなります。感染予防対策として、マスクの着用、検温や手指の消毒の徹底、オンラインの活用もしていますが、新型コロナウイルスの感染状況によっては、イベントなどの開催は難しくなります。しかし、コロナ下だからこそ弱い立場の人たちが孤立する人が出ないような居場所をつくる重要性も認識されてきています。

地域の思いを形に

「子どもたちはどうしても学校という狭い世界の物差ししかありません。そこで居場所がなくなってしまうと、どこにもいくところがなく孤立してしまいます。多世代が関われる居場所を作ること、子どもたちに学校以外の世界があることを知ってもらいたいです」となないろのもりの染谷さんは子どもたちへの思いを話してくれました。

めざすのは孤立しない・させない地域を作ること。地域の大人が関わり、子どもたちを地域で育む取り組みはまだ始まったばかりですが、着実に進んでいます。

その時来てくれた人それぞれができることを

小金ほのぼの食堂代表・安達 里季さん

青少年相談員や民生委員、子ども会やPTAなど、幅広く地域と関わりを持ってきた小金ほのぼの食堂の代表者・安達さん。その人柄と活動にひかれた皆さんが集まり、気負わずにのびのびと参加できる環境で、地域の居場所を盛り立てています。



安達さん

1人でも必要とする人がいるならやりたい

当時、地域で子ども食堂を始めるかどうか迷っていた安達さんを後押ししたのは、市民活動サポートセンターで行われた「まつどみらい会議」で、小金地区に住んでいる2人の男の子に出会ったことでした。「『その日食べるものがない』子がいることは知っていても、実際に会ったのは初めてでした。1人でも食堂を必要とする人がいるならやりたいと思いました」と安達さんは振り返ります。

そうして始まった子ども食堂は、地域の飲食店や農家など多くの皆さんの力添えもあり、さまざまな食事が並ぶビュッフェ形式で行われていました。さらに、食事だけではなく、地域の団体などがイベントも開催して、子どもたちを楽しませました。「その時来てくれた人それぞれができることを」と安達さんは言います。



コロナ下でも続く活動

昨年、新型コロナウイルスが猛威を振るう中でも、小金ほのぼの食堂は形を変えて活動を続けました。3月から夏にかけて、手作りのマスクを福祉施設や困っている人たちに届けました。「マスクは感染に気を付けながら直接手渡しするようにしました。そのときに、マスクを渡すだけで繋がりが終わらないよう、困ったこと



があったら連絡をしてくださいと伝えました」と安達さん。マスクを手に入れるのが特に難しい頃だったので、受け取った人たちはとても喜んでくれたそうです。数カ月後、マスクを渡した方から「コロナで仕事がなくなり、助けてほしい」と連絡がありました。出逢いを大切にしていきたい、そう安達さんは改めて思ったと言います。

感染拡大防止のため、お弁当を配布する形にして食堂も再開しました。そして、コロナ下で行事なども中止になり「勉強ばかりで学校がつまらない」という子どもたちの居場所として寄り添っています。

「いずれビュッフェ形式に戻したいね、という声もあります。その一方でお弁当なら外出ができない家族に持ち帰ることができる、という声もあります。今後はその両方で子ども食堂を開催していけたらと考えています」と安達さん。コロナ下であっても地域活動は形を変えて続いています。



これから始まる「地域でつくる居場所」づくり ～子どもから高齢者、障害者まで誰もがその人らしく生きられるまち～

(社福) 気づき 理事長・佐塚 みさ子さん

松戸市を拠点に、訪問看護・介護、居宅介護支援、障害者支援事業など幅広い事業で人々に寄り添い支援する、(社福)気づき理事長の佐塚さん。看護師としての経験を生かし、一人ひとりに寄り添ったケアを追求し続けた結果、子どもから高齢者、障害者まで誰もが暮らし・働くことができる、「地域でつくる居場所」の必要性を感じて活動を始めました。



佐塚さん

居場所づくりへの思い

看護師として訪問看護をする中で、患者の処置だけでなくそのほかの生活や、家族にも寄り添ったケアをしたいと考え、訪問看護事業を始めた佐塚さんは、「必要なことを無我夢中で追求し続けた結果、現在の事業数になっていました」と振り返ります。しかし、人工呼吸器を付けている人の介護施設への入居や、医療ケアが必要な障害児の保育施設への入園など、法律や規制によって制限されることが多く、医療や介護、障害支援に連携したサポートができない現状に直面しました。そこで、佐塚さんは「あらゆる垣根を取り払って支援できる施設と、地域交流の場になるような、地域農家の物産や食品の販売所などを併設して、みんなが集える居場所をつくりたい」と思うようになりました。

佐塚さんが参考にしようと思ったのが、名古屋市にある空き団地を活用した複合施設「ソーネおおぞね」です。地域住民から家庭の資源を現金やポイントで買い取り、そのポイントが利用できるリサイクルショップやカフェ・レストランで、障害者・就労困難者が働くほか、イベントスペースの併設など、そこではまさに地域に必要なとされている活動をしていました。まず地域の人の声を聞くことが不可欠と考えた佐塚さんは、六実・六高台地区で活動している皆さんとミーティングを開催しました。

地域から必要とされる居場所のために

町会の役員をはじめ、民生委員、NPOや社会福祉法人で活動している、総勢43人の参加者が集まり、地域の課題や何ができるのかをみんなで話し合い、自由に意見交換をしました。そこでは、地域情報の発信や、スマートフォンの使い方などのちょっとした暮らしの困りごとの相談所、子ども食堂や郷土料理教室など、食を通じて多世代がつながる場所、不登校の子どもや子育ての不安を抱える保護者が安心できる居場所などを求める声が多く挙がりました。一方で、本当に困っている人が来られない現状や、誰がどのように運営していくかなどの声も挙がりました。

「六実・六高台で暮らす皆さんの思いや声を直接聞くことで、課題も多く見つかりましたが、改めて居場所の必要性を感じました」と佐塚さん。さらに、「地域に寄り添うためには、自己満足の活動ではなく地域に必要とされる居場所であることが重要で、そのために、今後も地域団体や担い手の皆さんと話し合いを重ねていきたいです」と力強く語ってくれました。

そんな佐塚さんの姿勢からは、自身の経験から生まれた「誰もがその人らしく生きること」への熱い想いが伝わってきます。地域に必要なとされる「地域でつくる居場所づくり」はこれから始まります。



感染症対策に配慮してミーティングを実施





誰もが 出番と居場所のある街まつどを目指して

市では、地域の居場所づくりの支援に取り組んでいます。学校や職場、家庭とは異なる第3の居場所が身近にある地域、ゆるやかなつながりを持てる場がある地域など、地域にどんな場所があると良いか、地域の皆さんと考え、地域の誰もが参加でき、人と人もつながりを感じられる、孤立しない・させない地域を皆さんと一緒につくっていただける取り組みを進めています。

☎地域共生課 ☎710-3200

参加してください

地域共生社会ってどんな社会だろう？みんながつながる地域って？そんなことをみんなで考える機会の場所の提供を企画します。

教えてください

皆さんの地域のこと、居場所やサロン活動、たまり場などの情報をお寄せください。
15地区ごとに情報を集約し、皆さんに提供できるようにしていきます！

協力してください

居場所づくりやつながりづくりを市民の皆さんと進めていきます。

『どんな居場所があったらいいか』市に寄せられた地域の声を紹介します



年齢、世代にかかわらず
みんなが集える居場所

気軽にふらっと
立ち寄れる居場所

ここにいけば誰かが
いて落ち着くことが
できる場所



親子で参加できる
居場所



人とのつながりや
あたたかさを感じられる場

地域の情報が分かる
スペース



趣味や特技を活かして
担い手となる居場所

学校や会社、家とも違う
第3の居場所



どんな人でも参加できる
ごちゃまぜの居場所

Wi-Fiなど、
オンラインにつながる
居場所



地域の皆さんからさまざまな声が届いています。地域にはそこに住む皆さんの思いがあふれています！市では、世代や属性を超えて交流できる場、交流の方法、参加の方法などを皆さんと一緒に考えて、思いを形にできるよう取り組んでいきます。アイデアなどがありましたら気軽にお問い合わせください。



広告